

1960年代米国における学問中心カリキュラム開発に 関する一考察

— 音楽科に焦点をあてて —

今井康晴

(2007年10月4日受理)

A Study of Trend in 1960's about Development of Discipline-Centered-Curriculum in U.S.A.
— Focus on the music —

Yasuharu Imai

Abstract. This paper had two aims to clarify the problem concerning development of the curriculum of Music courses. The first was to illustrate the background of the reform of the curriculums focuses on Music courses in United States and Japan; especially investigate the records of the important symposiums and conferences which influenced on the reforming of Music courses. The second was to examine the characteristics of developmental aspects of Music course. In the 1960's, the structures and constructions of education whose productivity rate were not highly have begun to improve caused by the Sputnik 1957. In the field of natural sciences, the framework of discipline-centered-curriculum was concept which aimed to modernize the course structures of Mathematics, Sciences and Physics. The concept of discipline-centered-curriculum have introduced to Japan as "the reformation of curriculum", which influenced on evolving the construction of the theories of educational methodology, curriculum research and development. However, discipline centered curriculum have researched not only in natural scientific courses but also art courses in the United States.

Key words: music, concept, discipline-centered-curriculum

キーワード：音楽科，概念，学問中心カリキュラム

1. はじめに

経験主義教育による学力の低下が米国では、ハイスクールについて指摘されていた。周知のようにスプートニクショックを発端に、カリキュラム改革が一挙に表面化した。多くの自然科学系統の研究集団による、ウッズホール会議における討議の内容はブルーナー (Jerome S. Bruner) によって『教育の過程』にまとめられた。カリキュラム改革の理論において、注目される一つに学問中心カリキュラム (discipline centered curriculum) の構想がある。

わが国においても、1950年代末から民間の数学教育団体を中心に「教育内容の現代化¹⁾」が進められた。「現代化」は、教育方法学、教科教育などの分野や、1968年に改定された文部省の学習指導要領でも標榜されるなど、学校教育に大きな影響を及ぼした。

ところで、60年代の米国の学問中心カリキュラム開発は、芸術的教科においても開発研究が行われていた。

本稿では、芸術的教科領域である音楽科に焦点をあて、①音楽科カリキュラム改革の行われた背景を整理し、②音楽科カリキュラム改革に重要な影響を及ぼした、セミナーやシンポジウムについて検討する。そし

て、③音楽科におけるカリキュラム開発の特徴、カリキュラム改革の実情について考察する。

2. 音楽科カリキュラム開発の推進

(1) 青年作曲家プロジェクト

まず音楽科カリキュラム改革の背景は、国、音楽教育団体、財団など多岐に及んでいる。それらの諸側面を時代にそってカリキュラム改革の動向を述べていく。

1957年、まずフォード財団が音楽に関する研究を行った。フォード財団による研究は、音楽教育に特化したものではなく、当時の米国社会が抱えていた問題と諸芸術との関係において研究がなされた。マーク(Michael L. Mark)はフォード財団の研究に対して、「教育改革は、いくつかのカリキュラム領域では、教育者よりはむしろ、人道主義的な産業界の財団によってもたらされた²⁾」と述べている。

フォード財団は、音楽の中でも作曲家に意見を求め、作曲家と音楽教育の関係に焦点をあてた。そして、フォード財団は、作曲家のジョイオ(Norman Dello Joio)に意見を求めた。

ジョイオは、「この国の学校の現状では、合唱、バンド、オーケストラ、およびそれと関連した演奏グループは、はけ口を提供するものとなっているために、誰かを学校という状況に置いて、その状況の必要に応じて仕事をさせ、それぞれ、個別のグループ用の曲を書かせることは、当然、若者にははけ口を与え、若い生徒には、彼等に必要な現代音楽に接する機会をもたらし、教師を新鮮なレパトリーに関心を向けさせるように刺激し、コミュニティ全体に対し、作曲家は生きた存在で、コミュニティの中で正しく機能していることを意識させる³⁾」と提案した。

ジョイオの提案は結果的に、全米音楽評議会(National Music Council NMCと略す)が主宰となり、フォード財団の基金援助を得て、1959年、青年作曲家プロジェクト(Young Composer Project YCPと略す)の結成となった。

YCPの計画は35歳以下の若い作曲家を、客員作曲家として公立学校に派遣し、音楽教育に関わらせるというものであった。

この計画の目的を示すと以下のようになる。

- ①自分たち用の音楽が書かれた生徒は、現代音楽に対する関心と鑑賞力を発達させ、時が経つうちに、過去の音楽に敬意を払うようになる。
- ②そのことによって生徒は過去の音楽から現代音楽にも親しむことになる。

③また、教育に携わる音楽家は一般の生徒達がどう感じているかが把握できる。

④また音楽教師は現代音楽に対して目を開かせることが出来る⁴⁾。

YCP計画は1968年までに46人の作曲家たちを派遣し、更に5年間延長され1973年に終了した。

それらの動向に対して千成は「従来の硬直化した歌唱教材の学習や読譜中心主義の教授法、バンド活動への偏重とそれに関係する楽器演奏の技至上主義等からの転換が生じつつあり、それに応じてそれに対処する解決法や実践にかかわる問題が一度に出来ることになるわけである。しかしながら、アメリカ音楽教育の世界はこれらの諸問題につき積極的な動きを示すものである⁵⁾」と評価した。

またYCP計画によって、音楽関係者が、伝統的な歌唱教材や器楽教材にしか目を向けておらず、現代音楽を扱う準備のなさを露呈させた。同時に学問と実践という関係性におけるひとつの好例として重要な意義をもたらしした。

(2) エールセミナー

次に、音楽科カリキュラムの教育内容に関する動向について述べる。

学問中心カリキュラムにおいては、学問の「構造」、教科の「構造」、教材の「構造」が提案された。それは音楽科においても同様である。「構造」の追求は、その教科を作り上げている根底に目を向けることで得られた理解を基本として、特殊な理解へと転移させる方式である。

「構造」の観点にたつ場合、音楽科の「構造」とは何であるか、音楽科の実体を理解させるための「構造」論の追及などであるが、それと同時に芸術と人文科学の本格的な学習が、科学の分野での卓越性をより強めるという主張がなされた⁶⁾。

そうした二つの側面に基づく会議が1963年7月17日から28日までエール大学で「エールセミナー」(Yale Seminar)として開催された。エールセミナーの主催者は、エール大学の音楽教授パリスカ(Claude V. Palisca)で、セミナーの参加者は、31人の音楽家、音楽教育の改善に興味ある学者などであった。

エールセミナーにおける主な主題は、「音楽教材」と「音楽演奏」の二つの領域に焦点が当てられ検討された。

「音楽教材」に関して、音楽教育の専門家は現代音楽を教材として使用することについて、限られた範囲でのみしか承認を与えていなかった。また音楽家と音

楽教育者との関連がみられなかったため、以下の批判がなされた。

- ①教材にされるべき、音楽の遺産がほとんど質的に低劣なものである。
- ②教材の範囲が西欧クラシック音楽に限定されており、ジャズ、ポピュラー、フォークなどの形式はほとんど無視されてきた。
- ③子どもを魅了し、興味を湧かせる教材がほとんど見当たらず、子どものもつ興味、関心、や可能性といった観点が過少評価されている。
- ④クラス担任の技術を基盤とした教材が選ばれており、伴奏など貧弱が目立つ。
- ⑤音楽科における歌唱教材の位置のあり方が、表現というよりも歌詞の主題に注意が払われている⁷⁾。

「音楽教材」に関しては、YCP計画で示されたように、現代音楽に対する興味を集中させることを目的とし、それらの導入に重点を置いている。

「音楽演奏」に関しては、従来のアメリカ教育における器楽プログラムなどに評価を示し、多数の器楽を用いるアンサンブルや集団活動といった学習内容が音楽科の目的を支配するように提案した。その際に、チームワークや技能、技術といったこれまでの観点が個人の音楽性や独立性を重視することになった⁸⁾。

そして、上記の二つの領域に対する勧告が以下のように述べられた。

- ①音楽性の発達には、演奏、身体的運動、音楽の創造、耳の訓練および聴取を通じて達成される。セミナー参加者によって音楽性を発達させる手段の一つとして強調された創造性は、生徒のオリジナルを含むものである。
- ②学校音楽のレパートリーは、拡大されて、ジャズ、フォーク、現代音楽のみならず、あらゆる時代の最上の音楽を含むものでなければならない。拡大されたレパートリーは、実際に使える形、つまり手引き用の書物と視聴覚用の補助器具を含む装置とのセットの形で使用されなければならない。
- ③研究対象として価値のある鑑賞教材は、音楽カリキュラムで確固たる地位を占めなければならない。その場合、高等学校の生徒は、代表的な作品を用いるため、鑑賞、研究対象としての音楽が提供されなければならない。その目標は、生徒に多種多様な音楽ジャンルを効果的に、かつ良く理解して聴く手段を提供することにある。
- ④学校の演奏活動は、その曲自身が本格的な、また変

化に富んだレパートリーが確立された曲のアンサンブルを含まなければならない。これは、交響曲、弦楽合奏、室内オーケストラ、コンサート・バンド、など様々な規模の合唱を含むことになるであろう。また小規模のアンサンブルには、より意識を集中して参加する必要がある、成人の音楽活動にふさわしいものであるため特に重要である。

- ⑤上級理論と作品研究のコースが充実したコースを上級レベルの生徒に受講可能にしなければならない。また生徒が、自ら発見して音楽作品の素材を理解できるように構成されなければならない。
- ⑥各地域に存在する、作曲家、音楽家、音楽学者などの有識者を学校に導入することで専門的音楽と学校音楽の不均衡を縮めなければならない。また専門家には、若者の音楽性の発達を助長させる機会をあたえなければならない。
- ⑦学校の音楽プログラムは、コミュニティの音楽関係者という人的資源から利益を受けなければならない。人的資源は様々な能力を有する音楽専門家、高度に有能なアマチュア音楽家、など学校のプログラムを援助しうるコミュニティを中心としたアンサンブルを含む。その際音楽作品や研究文献を有する図書館も、学校の音楽プログラムと結合し利用されなければならない。
- ⑧全国を通じて、才能ある生徒は各地の中心的大都市で、更に進んだ音楽の勉強機会が与えられなければならない。そのため、各地域に教師集団、音楽と演劇、舞踊とアカデミー間の連携、芸術センターの教育活動が樹立されなければならない。
- ⑨教室と個人教授で行う音楽教授は、従来以上に視聴覚的補助手段を利用しなければならない。フィルム、録音機器、テレビなど学校の音楽プログラムにおいて重要な利用方法がある。
- ⑩エールセミナーで提案されたカリキュラム改訂は、教員養成、教員の再教育と関連していなければならない。音楽教育が不十分な教員は音楽の教育を受けなければならない。教員となる上での準備が不十分な音楽家は、教員としての訓練を受けなければならない。それらを実施すべく、大学の研究所、ワークショップ、大学院レベルでの音楽プログラムなど範囲を広げて創造性と音楽作品研究を強調したカリキュラムの要求を満たさなければならない⁹⁾。

エールセミナーの勧告による影響をマークは、「教育の媒体としての教具は、エールセミナー以降甚だしく改良され、洗練されたものとなった。(中略)エールセミナーの時点では少数の大都市にしか存在しな

かった表現芸術専攻の高等学校は、このセミナーの勧告通り、現在では多くの学校体系の中で創立されている。専門音楽家と音楽教育者の協力を求める勧告も、ある程度実現されている。(中略)学校の演奏団体のレパートリーは甚だしく拡大された結果、あらゆる時代、あらゆる様式の優れた音楽のかなりな部分を含むまでになった。アメリカの音楽教育では、鍵盤楽器の指導も発展しつつある。今日、多くの学校体系では、電子ピアノのラボを通じて、鍵盤楽器のグループ指導が行われている」と指摘した¹⁰⁾。

彼はエールセミナーの意義について「変化の誘因となる風潮を高まらせる上で貢献した。そこでは、音楽教育という専門職は伝統的カリキュラムの制約から解放され、従来とは異なる教授方法を真剣に考えることができた。」と述べた¹¹⁾。

またセオドア (Theddoe Tellstrom) も「子どもがみずからのものとして表現する能力、あるいは音楽反応の能力が、常に適切に、発現できるようにするためには、新しい指導法を考える必要があるし、それを実現するためには、新しい教材も考えねばならないだろう。このセミナーの討議結果によれば、音楽的理解力は、音楽の構造を知ることがいかに重要かという認識に立ったとき、初めて達成できるものだということであった¹²⁾」と述べている。

以上を踏まえると、音楽教育以外の関係者が参加し、指導法や教材を吟味することで社会の要求に応えたエールセミナーは、音楽科における学問中心カリキュラムに則した提案を行っていたといえる。

(3) タングルウッドシンポジウム

タングルウッドシンポジウム (The Tanglewood Symposium) は1967年7月23日から8月2日まで、ボストン・シンフォニー・オーケストラの夏の宿舎、マサチューセッツ州タングルウッドで開催された。このシンポジウムはパークシャー音楽センター、セオドア・プレッサー基金、ボストン大学美術学部と共同で、「全米音楽教育者会議」(Music Educators National Conference MENC と略す) が後援となった。

このシンポジウムの参加者も科学者、労働組合指導者、音楽家、社会学者、教育者、そのほかの団体、財団、政府の代表などであった。

その目的は、急激な社会的、経済的、文化的変化に直面した米国社会における音楽教育についての役割を論じ規定することにあった。また音楽科の効果をあげるための勧告もなされた。

そして主要なテーマとしては「米国社会における音楽」における、音楽教育独自の機能の明確化、新しい

音楽教育の主旨を伝えるための刊行物、それらが機運となって説得力ある行動を助長させる、などであった¹³⁾。

タングルウッドシンポジウムは、前半は、社会における芸術の役割と関連した価値体系、特徴、現代音楽、行動科学の役割、創造性、音楽教育を有効にする社会との協力について議論された。後半は、参加者が音楽教育関係者と顧問に限定された。そしてシンポジウムでなされた内容を系統的にし、適切な行動をとることが勧告された。

加えて、タングルウッドシンポジウムにおける議論の結果を「タングルウッド宣言」として以下のように宣言された。

「我々は、教育はその主要な目的の中に、生活技術、個としての実態の確立、創造性の育成を含んでいなければならないと信じる。音楽の学習はこれらの目的に貢献するものであり、我々は“音楽が学校カリキュラムの中核に置かれるように要求する”。(中略)教育者は、人間の個人的欲求と、一連の価値の変化、疎外、世代間の対立、人種、国際的緊張、新しいレジャーにより傷つけられた社会の要求などの双方を満たすため、その機会を発展させる責任を担わなければならない。」¹⁴⁾。

そして、音楽教育関係者はタングルウッドにおいて以下の諸点に同意した。

- ①音楽は芸術としての統合性が保持される限りにおいて最も優れている。
- ②カリキュラムには、あらゆる時代、様式、形式、および文化の音楽が含まれる。特に今日の10代のための音楽、アバンギャルド音楽、アメリカ民謡に加えて他文化の音楽を含め、我々の時代の音楽を包含するように拡大されねばならない。
- ③幼稚園から生涯教育まであらゆる教育機関は音楽のための教育カリキュラムや時間を提供すべきである。
- ④高等学校における芸術教育は、カリキュラムの重要な部分として広く認知されるべきである。
- ⑤教育におけるテクノロジー、テレビ、コンピューターの開発は音楽教育にも適用されるべきである。
- ⑥学習者、個人の要求、目標を達成し可能性を拡大する事に重点をおくべきである。
- ⑦音楽教育職は、文化的に個人を疎外する都市化と脱都市化において、社会的諸問題の解決に資するように、その技術、練達、洞察力を使用できなければならない。
- ⑧教員養成は拡張し、高等学校で音楽史や音楽文化論を教えられる教師を育成すべきであり、従来の教科課程を改善し、併せて幼児、成人、障害者を教えら

れる養育できる教師を提供すべきである¹⁵⁾。

タンゲルウッドシンポジウムは、エールセミナーでの討議結果を踏まえつつ、単に音楽科における推進ではなく、黒人開放運動、ベトナム戦争などの急激に変転する政治経済、社会文化の位相と直面した際に、音楽教育はどのような役割を果たすべきかという問題に応えるものでもあった。

また、質の高い音楽性、伝統的教材から現代作品に及ぶ教材化ではアジア、アフリカの音楽に対する認識を深める教員養成など、音楽科の総合的な改革が重視された。

3. 音楽科の内容に関する改革の動向

ところで、上記のセミナー、シンポジウムに対して、音楽科の内容はどのように反映され、また発展していったのか。

まずエールセミナーの後、「ジュリアード・レパトリー・プロジェクト」(Juilliard Repertory Project¹⁶⁾)などのエールセミナーの成果といえるプロジェクトが発足した。その後合衆国から支援を受けた「マンハッタンビル音楽カリキュラム計画」(The Manhattanville Music Curriculum Program, M.M.C.P. と略す)が発足した。

(1) マンハッタンビル音楽カリキュラム計画

1965年、合衆国教育局からの資金援助を受け、ニューヨークのマンハッタンビル聖心パルチェス・カレッジにちなんで名付けられた、「マンハッタンビル音楽カリキュラム計画」(The Manhattanville Music Curriculum Program)が進められた。

MMCPの目的は、音楽カリキュラムに関連した小中学校から高等学校までの、継続的な音楽学習の教材を発展、開発することにあった。具体的には、電子キーボード実験、科学的音楽プログラム、器楽プログラムの相互作用などの研究を行うことであった。加えて、23の研究集会が教師の再教育のために高等教育機関において支援された。

その計画は、以下の3段階のプログラムで構成された。

第1段階

第1段階は1966年実施された。それは思索と内省の期間であり、主に伝統的音楽教育の価値の妥当性と実践が問題とされた。

第2段階

第2段階は1967年に実施された。第1段階で得られ

たデータの厳選と統一をすることによるカリキュラムの構想が行われた。これは生徒たちの意識や教育内容、目的などの必要を満たすように計画され、統合したプランの構想に当てられた。また音楽の基本的特徴を定義し、カリキュラム作成の全体を通じて基本として役立った。

また具体的なカリキュラムの形として螺旋型(spiral)が採用された。このことによって基本概念の連続的提示や、様々な発達段階に応じた提示により習熟がなされた。

第3段階

第3段階は1968年に実施された。第3段階は当初の目的であったカリキュラムの厳選が行われた。第3段階を通して螺旋型カリキュラムは、幼児においては不適當であることが判明した。

またこれまでの総括として、教師たちの音楽的知識の希薄さや、技術の達成や演奏以外の目的を考えることが困難であることが指摘された¹⁷⁾。

そしてMMCPの中心的な推進者であったトーマス(Ronald B. Thomas)は、音楽の定義を伝達的手段、人間の環境を説明する芸術、創造的実現の手段に寄与するとし、それらの目的のために音楽を活用するようになるには、子どもたちの音楽の認識や知識を使えるように技術を発展させなければならないとした¹⁸⁾。

そうした前提を踏まえたうえで「音楽の構造を概念化し、認識して音響の言語を理解できなければならない¹⁹⁾」と指摘した。

MMCPの成果は、音楽科の構造として基本概念を捉えることに寄与したとともに、作曲、演奏、指揮、聴取といった諸技能を包括的に行うことで音楽科に備わっている技巧以上の成果を得させようとしていた。

また螺旋型カリキュラムの提示は教員たちにとって、重要な影響を持つこととなった。

次にタンゲルウッドシンポジウムの後に、その主旨を現実化するために音楽教育者団体のMENCが後援となり、「目標および目的プロジェクト」(The Goals and Objective Project, GO)を立ち上げた。

(2) GOプロジェクト

GOプロジェクトは1969年に始まった。18の小委員会と平行して運営委員会が任命された。個々の委員会には、音楽教育の特殊かつ個別的な側面に関する研究と勧告を行った。

GOプロジェクトの目標は、「すべての学校で総合的な音楽教育計画を遂行し、あらゆる年齢層の人々を音楽の学習と関連させ、質的に高い教員の養成を支援

し、音楽教授の際に最も効果的な技術と資料を使用すること²⁰⁾であった。

18の小委員会の主旨は以下のようになる。

- ①音楽教育者の養成
- ②音楽的行動の価値と評価
- ③包括的音楽性—高等学校における音楽の学習
- ④すべての若者に対する音楽
- ⑤都市の中心部における音楽教育
- ⑥音楽教育の研究
- ⑦学問としての音楽教育
- ⑧事実の発見
- ⑨審美教育
- ⑩情報科学
- ⑪児童期初期の音楽
- ⑫技術工学の衝撃
- ⑬高等教育の音楽
- ⑭学習課程
- ⑮国民生活の音楽の富裕化
- ⑯ MENC の専門的活動
- ⑰専門家の団体との関係
- ⑱ヨーロッパ以外の文化圏の音楽²¹⁾

個々の小委員会の課題に対する研究成果を基礎として、プロジェクトの代表者ポール・レーマンによって目標、目的が発表された。その後、各団体の代表者、全国委員会議長の提案などによって更に改訂され、最終的な目標、目的を1970年10月、MENCによって発表された。

その目標は35項目にも及んだが、最優先の目的として以下の8項目に絞り込んだ。

- ①生徒たちの社会的文化的状況がいかなる状態であれ、すべての生徒に対して刺激的で、社会の要求に呼応した音楽の授業プログラムを作成する。
- ②音楽の演奏、創作、鑑賞の3つの活動を関連させ、多種多様な音楽的行動を生み出すプログラムの研究を活性化させる。
- ③生徒たちのニーズに見合う音楽行動を教師が把握できるように努力する。
- ④音楽文化の多様化に対して、教師は積極的に対処すること。
- ⑤音楽を担当する教員の力量基準を確立すること。
- ⑥教員の再教育計画を拡大し、学生が従来よりも、より関わりがもてるようにする。
- ⑦音楽教授のすべての領域、レベルにおいて、カリキュラム、教授—学習、科学工学、教員構成、評価など、

それらと関連した問題の分野で主導権を担う。

- ⑧包括的で、優れた音楽教育計画を援助するため、すべての学校体系が十分な人材、時間、基金を確立すること²²⁾。

GOプロジェクトの結果として、MENCは教授に関する全国委員会を設立した。それは『学校の音楽プログラム：説明と基準 (The School Music Program: Description and Standards)²³⁾』と題する、著作に結実した。この著作の意図するものとして、マークは「すべての学校で質的に高い音楽プログラムを発展させる際に主導権を担うべきである、というタングルウッドシンポジウムに対する反応である。これは学校音楽プロジェクトに対する評価基準を与えている²⁴⁾。」と評価した。

以上が、60年代における音楽科カリキュラム改革の動向であった。

ここで、60年代以降の音楽科カリキュラムがどのような変遷を辿ったかについて言及する。アメリカの教育界は60年代後半から70年代前半にかけて、それまでの学問中心カリキュラムの反作用が現れた。「学校の人間化」や、70年代後半にかけて「基礎に帰れ (back to basic)」などが、それである。

これは、アメリカ教育の理想としてきた平等の原理が実現されていないこと、学力の不均衡、画一的教育内容による創造性の破壊など実態を反映するものであった。

このようなアメリカ教育の動向を踏まえ、音楽科においても、これまでに行われたセミナー、シンポジウム、カリキュラム計画を一度立ち止まって見直そうとする動きが現れ始めた。

その結果、1978年から79年に「アン・アーバー・シンポジウム」(Ann Arbor Symposium)が開かれた。

(3) アン・アーバー・シンポジウム

アン・アーバー・シンポジウムは、タングルウッドシンポジウムの10年を経て開催された。主催はMENCで、ミシガン大学の音楽学部教授レーマン (Paul R. Lehman) と同大学の心理学主任教授のマッキーチャー (McKeachie, Wilbert James) が加わった。

アン・アーバー・シンポジウムの特徴は、まずタングルウッドシンポジウム以降の社会情勢の変化、とくに「基礎に帰れ」とした教育運動に応える責務を負っていた。

そのため、アン・アーバー・シンポジウムが、タングルウッドシンポジウムの主要テーマであった何を、何のために教えるか、という課題ではなく、いかに教

えるか、というきわめて実用的で基礎的な問題が論議の対象と浮上していた²⁵⁾。

もう一つの特徴は、音楽科の改革に心理学が関わったということである。川島は、「全米で開催される学術会議は毎年数え切れないほどあるがこのシンポジウムはいくつかの点で他と異なっている。第1は音楽教育と心理学という異なる二つの学問領域を一つにしたこと、第2は開会の期間を二つに設け、まず1978年の秋、12名の音楽教育学者が質問を含む論文発表を行い、心理学者がその場では簡単に答え、十分に準備して10ヵ月後の1979年の夏に答えられるように次の開会期間を設けたことである²⁶⁾。」と述べている。

具体的には、聴視覚、運動学習、子どもの発達、認知技能、記憶と情報処理、情動と動機づけ、などのテーマを元に、音楽教育学者が提案し、心理学者が答えるという構成であった。

シンポジウム全体を通じて、心理学者たちに現在行われている音楽教育の実情を理解してもらうことと、同時に、音楽教育における心理学の必要性を明らかにすることが目的とされた²⁷⁾。

しかし、村尾は、シンポジウムの報告者、マーフィー(J. Murphy)を引用し「シンポジウムは『音楽の教授・学習への……応用』よりも『音楽の……心理学…』に関する研究が中心テーマとなった。参会者、とりわけ現場教師が強い不満を示したのは、ある意味で当然なのかもしれない。しかし、「不満」の中身には、心理学的研究の基本的なターム、手続きなどに不慣れで、親しめなかったということが少なくなかった²⁸⁾」とその問題点を指摘している。

また学問と教育現場の間の温度差が改めて露呈したシンポジウムでもあった。他方、小川は「アン・アーバーシンポジウムの大きな意義は、音楽教育の実践的な面よりもむしろ音楽教育の研究面での新たな領域を広げた所にあるといえるだろう²⁹⁾。」と肯定的に評価する。

以上の点でアン・アーバー・シンポジウムのもつ性格は、アメリカ教育のおかれている改革状況を映し出している。それは彼らに音楽教育の心理学的側面の拡大に貢献はしたが、一方で音楽と心理という二つの領域を充実させることは困難であった。

4. まとめ

本稿は、60年代の米国における学問中心カリキュラム開発の動向に焦点をあてて、芸術的教科である音楽科のカリキュラム改革の実情とその性格を中心に明らかにした。

学問中心カリキュラムにおける中心課題は、教科の「構造」、教材の「構造」、といった学問の「構造」化であったが、それらは難解な理論を構造化することによって分かりやすく翻訳し、子どもたちに教授することであった。

音楽科における「構造」論は、エールセミナーやタングルウッドシンポジウムなどにおいて「概念学習 (concept approach)」として提案された。

学問中心カリキュラムの基点となったウッズホール会議と音楽科におけるエールセミナー、タングルウッドシンポジウムについて、セオドアは、「3つの会議のすべてに共通した提議課題は、新しい教育課程は、学者、教師、教育専門家、そのほかの教育関係の人の最高の英知と創意を結集して、現代の要求に的確に答えるよう作り替えねばならないということ。そして教材は、現代的内容で、かつ、教育的に価値のあるもの、という角度から、吟味改訂すべきであり、それにも増して大切なのは、音楽の本質を生徒に伝える、その過程での展開の仕方の研究だ³⁰⁾」と述べた。

教材に関する開発においては、従来の音楽科から脱却した、ジャズ、ポピュラー、フォークなど現代音楽の教材開発が企画された。

音楽器具に関しては、キーボード、テレビ、音楽テープなどを駆使した質の高い教育内容が提案された。

また、それらの教材、音楽器具を十分に扱う仕方や現代音楽を教えるという教員養成、再教育に関しても討議された。特にYCP計画における専門家を教育現場に関わらせることや、エールセミナーなどでの、地域に存在する音楽関係者、あるいは作曲家といった人的資源の活用など、従来の音楽科に固執することなく、現代の英知を教育現場に送り込むことが示唆されている。

それらの充実を図る、MMCPやGOプロジェクトでの試みは、最終的には、当時の風潮を踏まえ、学力の不均衡や画一化をなくす方向に向かうこととなった。

一般に開発担当の科学者と現場の教師との乖離や教育実践の画一化が、学問中心カリキュラムの衰退の一因となったことはよく知られている。

しかし、音楽科におけるカリキュラム改革は、時代状況や社会情勢を踏まえた課題だけでなく、転じて音楽科そのものの課題に対する改革であり、演奏や鑑賞という個の領域に特化した才能教育に終始するものではない。アン・アーバー・シンポジウムでは音楽科のカリキュラムに対して心理学が導入されるなど、その動きは必ずしも衰退していない。今日もなお2007年度版のタングルウッドシンポジウムなどが報告されている³¹⁾。

このように米国における音楽科カリキュラム開発の

動向を検討すると、我が国においても、音楽科に特化したセミナー、シンポジウムが開かれてしかるべきであり、その際、米国のように民間を活用し、各テーマに沿った探求が必要であると思われる。また音楽科という一つの教科領域に閉鎖されることなく、美学、哲学、心理学のような人文学の領域に視野を広げる研究開発が必要であろう。

【注】

- 1) 教育内容の現代化は、従来の経験主義教育による学力低下への不満、批判を打開することや、教育内容を、現代の科学・技術・文化などと歩調を合わせ更新させることを目的とし、科学の体系性を重視する教育内容をめざすものであった。具体的には算数、数学の領域では小学校5年生で「集合論」が導入された。
- 2) Michael L. Mark (1978) *Contemporary Music Education*. SCHIRMER BOOKS A Division of Macmillan Publishing Co. NEW YORK p.24. 松本ミサヲ／田畑八郎共訳『音楽教育の現代化』音楽之友社 1986, 37頁。
- 3) *Ibid.* p.36 訳書37頁。
- 4) 千成俊夫「米国における音楽教育カリキュラム改革(Ⅰ) -60年代以降の動向をめぐって-」『奈良教育大学紀要』第33巻第1号 1984 奈良教育大学 95頁参照。
- 5) 同上 93頁。
- 6) *Ibid.* Michael L. Mark (1978) *Contemporary Music Education*. p.41. 訳書 43頁。
- 7) *Ibid.* p.42 訳書 44頁参照。
- 8) *Ibid.* pp.42-43 訳書 45-46頁参照。
- 9) *Ibid.* pp.44-45 訳書 47-48頁参照。
- 10) *Ibid.* pp.45-46 訳書 49-51頁。
- 11) *Ibid.* p.45 訳書 49頁。
- 12) Theodore Tellstrom (1971) *Music in American Education Past and Present* HOLT, RINEHART AND WINSTON, INC. p.243. セオドア・テルストロム著 川島正二訳『アメリカ音楽教育史-教育思想の過去と現在-』音楽鑑賞教育振興会 1985 314頁。
- 13) *Ibid.* p.244 訳書 315頁。
- 14) Robert A. Choate "The Tanglewood Symposium-Music in American Society" *Music Educators Journal* November 1967, Volume 54, Number 3 p.49.
- 15) *Ibid.* p.51.
- 16) ジュリアード・レパトリー・プロジェクトは、エールセミナーのメンバーの一人、ジュリアード音楽院の部長ギデオンのウォールドロップ (Gideon Waldrop) の主催のもと、低学年の音楽教員に使用可能なレパトリーを充実させるため、その教材、器具に対する補助を求め、申請された。具体的には、幼稚園から第6学年までに使用可能な最高度の音楽の研究と収集にあった。
- 17) *Ibid.* Michael L. Mark (1978) *Contemporary Music Education* pp.135-137. 訳書 128-131頁参照。
- 18) Ronald B. Thomas, *MMCP Final Report, Part I*, August 1970 United States Office of Education p.2.
- 19) Ronald B. Thomas, *MMCP Synthesis* Bardonia, N.Y. Media Materials, 1970 p.4.
- 20) "The "GO" Project: Where Is It Heading?", *Music Educators Journal* February 1970 Volume 50, no.6 pp.44.
- 21) *Ibid.* pp.44-45.
- 22) "Goals and Objectives for Music Education," *Music Educators Journal*, December 1970 Volume 57, n.4 pp.24-25.
- 23) この著作の中で、素人と専門家の双方が、それを背景として自分の学校の音楽教育計画を比較し合うことで、学校音楽プログラムの質的面的の向上に関する記述がなされた。またカリキュラム、教員養成計画、などの基準や、施設、器具などの必要品に関する基準なども示された。
- 24) *Ibid.* Michael L. Mark (1978) *Contemporary Music Education*. p.58. 訳書 68頁。
- 25) 村尾忠廣・梅沢由紀子・堀曜子「音楽の教授・学習における心理学の応用 アン・アーバー・シンポジウム-マーフィ報告が意味するもの」『季刊音楽教育研究』1981 no.27 79頁。
- 26) 川島正二「音楽教育の全米研究集会に関する研究-アーナーバー・シンポジウム-」『兵庫教育大学研究紀要. 第2分冊, 言語系教育・社会系教育・芸術系教育』1984 兵庫教育大学研究紀要 93-94頁。
- 27) 前掲 村尾忠廣・梅沢由紀子・堀曜子「音楽の教授・学習における心理学の応用 アン・アーバー・シンポジウム-マーフィ報告が意味するもの」80頁参照。
- 28) 同上 87頁。
- 29) 小川昌文「20世紀のアメリカ合衆国の音楽史概説」『大分大学教育学部研究紀要』第16巻 第1号 1994 136頁。
- 30) *Ibid.* Theodore Tellstrom (1971) *Music in American Education Past and Present* pp.242-243. 訳書 315-

316頁。

- 31) 小川昌文 「タングルウッド・シンポジウム考
その1—あるいはアメリカ音楽教育の一座標—」『上

越教育大学研究紀要』第25巻第2号 2006 上越教
育大学研究紀要 412頁参照。

(主任指導教員 土橋 寶)